The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 一九四四年一月-四月 空襲と疎開、そのなかで書き続けるということ |
| Author(s) | 滝口, 明祥 |
| Citation | 太宰治スタディーズ. 2016, 6, p. 44-47 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/57192 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【戦局】

▼1月

・米英ソがヤルタで会談。

▼3月

・東京大空襲。

・米軍、硫黄島を制圧。

▼4月

・米軍、沖縄本島に上陸。

・ルーズベルト死去、トルーマン新大統領就任。

・沖縄に向かっていた戦艦大和が撃沈される。

・ムッソリーニ銃殺。

・ヒットラー自殺。

## 一九四五年一月―四月　空襲と疎開、そのなかで書き続けるということ／滝口明祥

「月刊東奥」一月号の「自著を語る」欄に掲載された「日本文学の伝統に根ざすもの」で太宰は、『晩年』「以来今日迄の著書と云えば二十に余るのですが、短編集では『千代女』『東京八景』長篇では『新ハムレット』や新日本文藝叢書の『石大臣実朝』『正義と微笑』、新潮社の昭和名作選集『富嶽百景』などが受けたやうでした」と、これまでの自身の道のりを振り返る。また、近刊の『津軽』や刊行予定の『新釈諸国噺』を挙げ、「今迄の日本の文学の伝統はどつちかと云ふとやはり欧米第一主義でしたが、日本文学には日本文学としての他の追従を許さないよさがあるのです。日本文学の伝統に根ざしたもの――其処に私の目標を置いて行きたいと考へてゐます」と述べている。もちろん、これを太宰の本心と受け取ることはナイーブに過ぎるだろう。ここには厳しい検閲と悪化する出版事情のもとで、それでも著作を刊行していこうとする作家のしたたかな戦略をこそ見るべきなのだ。

実際、悪化する情勢の中でも太宰は精力的に執筆を継続している。一月二十七日付で『新釈諸国噺』が生活社から刊行されたが、その頃、太宰はすでに『惜別』（朝日新聞社）の執筆に勤しんでいた。二月初めに太宰の愛読者であった竹内好から『魯迅』（一九四四・一二、日本評論社）が送られてきたが、太宰はそれによって『惜別』の構想を大幅に変更する必要は認めなかったのだろう。同じ月の二〇日頃には脱稿している。だが、ますます厳しさを増す戦局のなかで、刊行は戦後の九月にまでずれ込むことになった。ちなみに、『魯迅』刊行時にすでに戦地にいた竹内が太宰の『惜別』を読み、深く失望するのは、一九四六年六月の帰国後のことだ。

一九四五年に入ると、出版界にもより一層、戦局の影響が出始めていた。たとえば、一九四四年に解散した改造社から河出書房に買い取られた「文藝」はA判の用紙が確保できず、一月号から判型をB6判に変更している。また、「文藝春秋」も表紙を二色刷りから一色刷りにし、表紙にはイラストではなく目次を刷り込むという創刊当時のスタイルに戻ってい

【社会】
▼1月
・東海地方に大地震。
▼2月
・日本新聞会解散し、日本新聞公社設立。
▼3月
・国民勤労動員令公布。
・三木清、検挙される。
▼4月
・小磯内閣総辞職、鈴木貫太郎が新しい首相となる。

る。刊行が予定通りいかず、遅れる雑誌もいくつもあった。それまでは一月号は一二月に出るのが普通だったのに、もはや二月になろうとする頃に一月号が出るという事態が起き始めていたのである。

そのような厳しい状況のなかで創作活動に励んでいたのは、もちろん太宰だけではない。たとえば、前年に東京帝国大学に入学したばかりの三島由紀夫がそうだ。一月一〇日から勤労動員で群馬県の飛行機工場に配属された三島は、その工場の総務課で暇を持て余し、「中世」の執筆に専念した。二月初旬の「擱筆直後に赤紙が来たときは、神々が私に形見となる作品を書かせるために、召集直前に完成させて下すつたか、といふ、大そう大袈裟な感想を持つた。そのせゐか、これは私の小説のなかではめづらしく暗い小説である。しかし神々はもつと皮肉などんでんがへしを用意してゐて、赤紙の結果は、軍医のつまらない誤診による即日帰郷といふ滑稽な結末になつた」（三島由紀夫「あとがき」、『三島由紀夫作品集5』一九五四・一、新潮社）。その後、三島は「文藝」を編集していた野田宇太郎と知り合い、三月に野田を介して第一著作集の『花ざかりの森』（一九四四・一〇、七丈書院）を川端康成に献呈している。

また、中野重治は後に『鷗外その側面』（一九五二・六、筑摩書房）としてまとめられる「「独逸日記」について」や「しげ女の文体」などを二月に発表している。すでに鷗外論をまとめて筑摩書房から刊行される計画があったものの、その後は終戦や戦後の混乱のなかでなかなか書き進められず、実際の刊行は七年後になった。

同じ二月に、戦争詩で有名だった大木惇夫が大東亜戦争詩集の第二輯『雲と椰子』を刊行している。その大木の編纂でやはり二月に出版されたのが、一兵士だった吉田嘉七が戦地で書いた『ガダルカナル戦詩集』である。鶴見俊輔が言うように、「この文章が、戦争の後半、もはやこの戦争にたやすく勝つ見こみがないとわかった日々に、兵士として自分もまた呼び出される時を待つ若い人びとに与えた影響はふかい」かっただろう（「解説」、『昭和

【文化】

▼1月

・成瀬己喜男監督の『勝利の日まで』（東宝）公開。

・野口雨情没。

▼2月

・溝口健二監督の『名刀美女丸』（松竹）公開。

▼3月

・東京大空襲による出版社の被害大きく、多くの雑誌が休刊となる。

▼4月

・長編アニメ『桃太郎　海の神兵』（松竹）公開。

・佐々木康監督の『乙女のゐる基地』（松竹）公開。

・田村俊子没。

---

戦争文学全集5』一九六四・一二、集英社）。その一端は、井上光晴が戦後に書いた小説「ガダルカナル戦詩集」（『新日本文学』一九五八・五）によっても窺い知ることができる。

三月六日には、治安維持法違反で検挙されていた高倉テルが警視庁から逃亡するという事件が起きている。同月二一日に高倉は再び検挙されるが、逃亡中の高倉をかくまったとして三木清も検挙された。ちなみに、三木は戦争が終わっても獄中に留めおかれ、九月二六日に死亡している。

すでに東京においても本格的な空襲が珍しくなくなっていたが、三月一〇日の東京大空襲の被害はひときわ甚大だった。B29一五〇機から焼夷弾約二〇万個が落とされ、下町一帯が大火災となり、赤く燃えた空は太宰宅があった三鷹からもよく見えたという。朝になって、吉祥寺の自宅から野田宇太郎が、依頼していた原稿を受け取るために太宰宅を訪ねてきた。野田は、河出書房は焼けたかもしれないが、たとえどんなことがあっても、「文藝」は刊行するつもりだ、と太宰に告げた（野田宇太郎『灰の季節』一九五八・五、修道社）。そして野田は中央線に乗って河出書房に向かうが、中央線は市ヶ谷までしか運転していない。手前の四谷で下車し、新宿―日比谷間だけ都電が通じているというので、それで日比谷に出て、日本橋まで歩いた。そこはまだ至るところで火が燃え燻ぶっており、空襲前の風景とは一変していたと言う。もちろん、河出書房の社屋も焼け落ちていた。

だが、「文藝」の編集に必要なものは、野田は全て持ち歩いていた。「新潮」や「文藝春秋」といった雑誌までがのきなみ四月号以降は刊行が中絶するなか、野田の尽力によって「文藝」四月号は（発売は五月下旬になったが）刊行され、太宰が野田に手渡した「竹青」も無事それに掲載されたのである。

東京大空襲があった日、下谷龍泉寺で罹災した弟子の小山清が太宰を頼ってやって来た。その小山の勧めにしたがって、太宰は妻子を甲府にある妻の実家に疎開させることとする。妻の津島美知子は、「このような事態に当たって、家長である太宰は、何一つはっきりとし

【代表作】

▼1月

・武田麟太郎「弥生さん」（「文藝」）
・上田廣「基地の花」（「文藝春秋」）
・太宰治『新釈諸国噺』（生活社）
・前川佐美雄『金剛』（人文書院）

▼2月

・中野重治「「独逸日記」について」（「新文学」）
・上林暁「汽車の中」（「大通信」）
・中野重治「しげ女の文体」（「文藝」）
・三島由紀夫「中世」（「文藝世紀」）
・大木淳夫『雲と椰子』（北原出版）
・窪田空穂『明闇』（青磁社）
・吉田嘉七『ガダルカナル戦詩集』（毎日新聞社）

▼3月

・小田嶽夫「祖国の山河」（「征旗」）
・佐藤春夫「バリ島」（「文藝」）

▼4月

・太宰治「竹青」（「文藝」）
・火野葦平「島」（「文藝」）
・斎藤茂吉『文学直路』（青磁社）

---

た判断も下さず、意見も出さず、小山さんの言うがままに進退をきめることになったのが、おもしろくなく」、「小山さんが狭いわが家に闖入してきたために追い出されるような気もし」たと回想している（『回想の太宰治』一九七八・五、人文書院）。

三月末に太宰は妻子を甲府に送っていった。三月一四日に妻の母が亡くなり、妻の弟の石原明は軍務で家を離れていたために、妻の妹である愛子が留守宅を預かっている状態だった。そのような事情もあり、太宰は自分も疎開することにはためらいがあったようで、四月二日に帰京した。

だが、帰京した直後、三鷹の自宅あたりが空襲にあった。田中英光がたまたま泊りにきており、小山清と三人で家の防空壕に避難した。「太宰、小山氏、田中氏、三人の大男が、小さな壕で死と紙一重の恐怖を味わったわけである。高射砲の音にさえ胸の高鳴っていた小心の太宰などほとんど失神状態だったろうと思う」（津島美知子前掲書）。その二日後にも空襲があり、太宰と小山は吉祥寺の亀井勝一郎宅に五日ほど身を寄せたのち、甲府へと旅立った。それまで東京に踏みとどまっていた他の文学者たちの多くも、三月から四月にかけて次々に疎開していった。そのなかには、二月に「汽車の中」という佳作を発表していた上林暁の他、斎藤茂吉や佐藤春夫もいた。

戦局は刻々と悪化していた。三月に硫黄島を制圧した米軍は、続けて沖縄へ進み、それから約三ヶ月にわたって日本軍と激しい戦いを繰り広げることとなる。戦局悪化の責任を取り、四月七日に小磯内閣が総辞職し、代わって鈴木貫太郎が組閣を行なったが、それで事態が変わるわけもなかった。四月末にはイタリアではムッソリーニが銃殺され、ドイツでもヒトラーが自殺し、日本の国際的な孤立はますます明らかになろうとしていた。

甲府で太宰は、近くの甲運村に疎開していた井伏鱒二や地元の同人雑誌「中部文学」の同人たちと交流するなどの日々を過ごしながら、『お伽草紙』の執筆を継続している。困難な状況のなかでも、太宰の創作意欲は少しも衰えていなかったのである。